

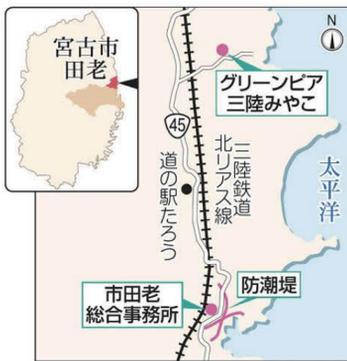
再建 長い道のり一歩

被災地に 生きる

宮古・田老の今



建物の跡地に草が茂る宮古市田老の旧市街地。津波が押し寄せた田老一中グラウンドにはチューリップが咲いていた



高台移転計画が始動

東日本大震災から1年2カ月が過ぎた。過去幾多の津波災害を乗り越え、復興を遂げてきた宮古市田老。1933(昭和8)年の昭和の大津波を経験し各種防災に取り組んできたこの地区でも、平成の大津波から住民を守る手が届かなかった。高台移転や浸水区域をかき

昭和8年の大津波 防波堤のまちは、命を 市は今年3月末に住民の指導によって高台移転を進めてきたが、田老地区住民は現地再建の道を選んだ。世帯が多かったことや漁業者の利便性を考え、巨防波堤を築造、避難路を考慮した市街地計画を進めてきた。

仮設住民 思い揺れ

古里「残るか、出るか」

407戸の仮設住宅 仮設住宅は3カ所の入居者があふれた。田老地区は約50人減少。田老地区外に自宅を自力再建するなどして引越す住民が出始めている。

この状況を受けて、長年田老で暮らし、現在は仮設住宅に住む松本義男さん(81)も「田老にいたいのか、出たいのか、簡単に結論が出せない」と吐露する。



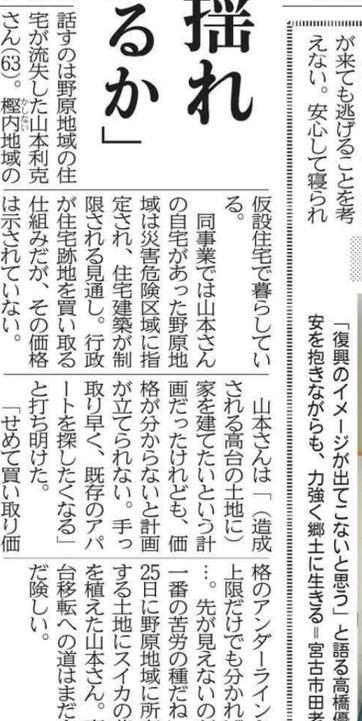
グリーンピア三陸みやこの仮設住宅群。新居に引越す住民が出始めている

住宅跡地に 茂る緑

海抜約10分の巨大防波堤。住宅などが町を連ねた地区を囲む宮古市田老。東日本大震災で一部は倒壊したまま。昨年3月11日の大津波は1.2メートルにわたって、最大浸水深は1.5メートルに達した。浜仕事を営む漁家の

野中地域で13・9割。浸水区域内の建物の約84%が流失。全壊する被害を受けた。震災から1年2カ月前、田老地区の町並みが再び緑に覆われ、花々が咲き出す様子。

「真崎わかめ」復活へ 芯抜き始まり浜明るく



ワカメの芯抜きをする浜の女性たち。生活の復興へ、一本ずつ地道な作業が続く

潮の香りが漂う仮設住宅。もう一方の手は指を消毒し、ワカメの芯を抜く作業に集中する。一本ずつ地道な作業が続く。真崎わかめは肉厚で歯応えが良いのが特徴。養殖ワカメの収穫が始まる春は新ものが出回る。手際よく作業する村田さんの表情に充実感がにじんでいた。7月下旬には、海に出る男たちのワカメ採掘が始まる。

高橋さん わが町を語る



「復興のイメージが出てこない」と語る高橋さん。将来への不安を抱きながらも、力強く郷土に生きる宮古市田老の理容店タカハシ

「少しずつ、被災前のように気持ち落ち着きつつあるのかな。少しでも、自分の生活を取り戻そうと努力しているのだから」。グリーンピア三陸みやこの仮設住宅で暮らす理容師高橋さん(61)。昨年5月の入居から1年が過ぎ、住民の心境の変化を感じ取っている。「地震イコール津波」の意識が根付く沿岸地域。高台の仮設暮らしも実感している。仮設に住まわせたのも、地震が来ても逃げられることを考えたい。安心して暮らしたい。

日常回復 少しずつ 再開店舗を 憩いの場に

45号沿いにあった自宅兼住宅へ入居後もタカハシを再開した。昨年8月1日には市田老総合事務所みんなが被災者、不便に近く建てたプレハブで感じている人もいると思われ、再開した。

未来図示し不安解消を

宮古市田老のグリーンピア三陸みやこの仮設住宅で生活する住民らに、今後の生活の未来図を示し、不安を解消する取り組みが進められている。

被災者からのメッセージ

宮古市田老のグリーンピア三陸みやこの仮設住宅で生活する住民らに、今後の生活の未来図を示し、不安を解消する取り組みが進められている。

宮古市田老のグリーンピア三陸みやこの仮設住宅で生活する住民らに、今後の生活の未来図を示し、不安を解消する取り組みが進められている。